

(生活科・社会科)

「個が輝き、共に育ちあう学級をめざして」

—「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実—

大阪市立野田小学校 屋良一輝

1. 研究主題設定の理由

本校では、長年、知識の習得はできるものの、知識を活用して思考し、表現することが苦手であるという子どもの傾向があった。また、学習に対し指示されたことはできるが、自分で考えて活動する主体的な面が見られにくい傾向もあった。そのため、令和元年度から「主体的・対話的で深い学び」を視点として生活科・社会科の研究を進めることで、授業づくりや指導方法の向上が見られ、子どもが能動的に思考する様子が見られるようになった。

しかし、「発言の固定化」や「話合いの深まりが見られない」「学力高位層のニーズに対応できていない」という課題が見えてきた。そのため、できるだけひとりひとりに対応して授業づくりを行い、子ども側の視点からの「個別最適な学び」を軸として個の学びをもとにした「協働的な学び」を一体的に充実させていく研究を進めていくことにした。

2. 研究の趣旨

学力・学習状況調査や大阪市経年調査の結果から、社会科・生活科のこれでの研究の積み上げによって、子どもの振り返る力、思考力の向上などの成果が見られるようになってきていた。また、子ども同士の対話の価値を子ども自身が感じるようになってきていた。

そこで、本校のこれまでの研究の積み上げを継承しつつ、個の学びに焦点を当て、子どもの看取りから支援していき、最終的には自立した子どもを目指す授業づくりを行うようにする。ただ、ひとりひとりに合わせ、自立した子どもをつくり授業づくりは容易ではない。そのために、まずは子どもに選択する場面を設定することからはじめる。これまでの授業スタイルは、子どもの選択場面が非常に少なく、どうしても教師主導になりがちであった。「個別最適な学び」として学習方法の選択を主として実践する。「協働的な学び」については、学習形態として、ペアからグループ、全体へ、そして深める学びを研究の視点として実践する。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 個別最適な学び

○ 内容選択

→学習内容によって選択できるものを設定して、子どもが自分で選択できるようにする。

○ 方法選択

→学習する際に教科書・資料集・本・PC を活用するのかやノートのまとめ方も自分で選択する

○ 各学年での段階的設定

→低学年：自分が活動する内容や発表方法を選び、表現することができる。（わたしは○○

をやってみよう)

→ 中学年：問題を解決するために、複数の資料を比較し自分が調べる内容を1つ以上選び、まとめることができる。(わたしは A の資料を調べて、～ということがわかった。)

→ 高学年：問題を解決するために、複数の資料を比較し自分が調べる内容を2つ以上選び、まとめることができる。(わたしは B と C の資料を調べて、～ということがわかった。)

視点② 協働的な学び

○ 段階的な話し合い

→ ①全員が自分の考えを表現する、②全体に話し合った内容を報告する、③全体で考えを深める

○ 各学年の段階設定

→ 低学年：話し合いにより自分の考えを広めることができる。(〇〇さんの～という考えがよかった。なぜなら～)

→ 中学年：話し合いにより自分の考えが広めたり、深めたりすることができる。〇〇さんの～という考えで自分は△と思った。なぜなら～(納得)

→ 高学年：話し合いにより自分の考えが広めたり、深めたりして、自分の考えを再構築することができる。(〇〇さんの～という考えで自分の考えは□になった。なぜなら～(確信)(変化))

○ 子どもの学びを助けるチョークの色設定

→ 問い(めあて)・・・黄

事実・・・白

子どもの考え・・・オレンジ

大切な言葉・・・赤(線・丸)

○ つなぎ言葉の活用

→ 「～に似ていて」「～とちがって」「～に付け足して」「まとめると～」「～さんの意見で～」

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○ 見通しをもって問題を解決しようとする姿が見られるようになり、特に学習方法を自分で選択できるようになってきた。

○ 話し合うことで自分の学びが深まることを子ども自身が実感するようになってきた。つなぎ言葉も自然と使えるようになってきた。

○ 学力・学習状況調査での経年変化から「課題に向けて自分で見通しをもって解決していますか」「話し合いによって考えを深めたり、広めたりすることができていますか」の数値が段階的に向上している。

(2) 今後の課題

○ 「個別最適な学び」については、その理念をもとにどのような授業が可能なのか模索していく。

○ 「協働的な学び」に関しては、子ども同士の協働だけでなく、地域や企業、行政、NPO など実社会との協働も模索していく。